遊び方

覚えていますか?ベーゴマの遊びかた

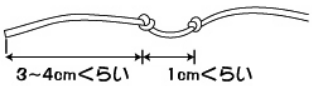
男の子なら、子供のころベーゴマに夢中になった方も多いと思いますが、その廻し方、遊び方、今でも覚えていますか?

加工の仕方

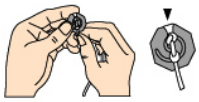
ひもの巻き方(女巻き・右利きの場合)

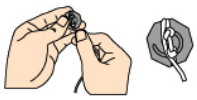
1) ひもの端から3〜4センチの所に1つ目の結び目を作ります。

2) 1)の結び目から約1cm離れた所に2つ目の結び目を作ります。

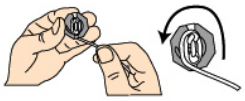


3) ベーゴマの裏(渦巻きのある側)を手前にして、左手の人差し指・中指・薬指にベーゴマをのせ、右手でひもの先をベーゴマにかけます。左手の人差し指でベーゴマのひもをお押さえながら、コブとコブの真ん中にベーゴマの山の頂点がくるようにします。左手の親指でひもが外れないように強く押さえ、右手の親指と人差し指でひもを裏まで引っかけるように強くひと巻きします。

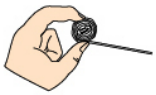




4) ひもを左巻きに巻きつけていきます。最初のひと巻きめを、強く巻くのがコツです。
(左利きの人は逆に巻く)

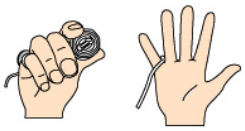


5) そのままくずれないように、左巻きで6〜7巻きします。(左利きの人は逆に巻く)



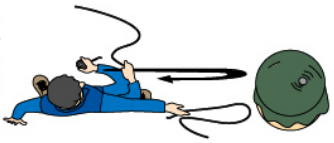
持ち方

右手の親指と人差し指でベーゴマをはさむように持ち、下から中指をあてます。あまったひもを右手の小指に巻きつけて、 ひもがいっしょに飛んで行かないようにします。



廻し方

ひもの巻けたベーゴマを親指と人差し指でしっかりにぎり、ひじを曲げてベーゴマの床に向かって漢字の一を書くように投げ入れます。投げ入れたら真っ直ぐに引き戻します。この時、ベーゴマと床が水平になるように投げ入れる事がコツです。



床の作り方

1. 台になるバケツや漬け物樽を用意します。
2. トラックの幌生地やビニールなどのシートを張ります。
3. まわりをひもやゴムひもなどで結びます。

ルール

かけ声に合わせて、同時に床の中にベーゴマを廻し入れ、外にはじき出されたら負けです。試合によっては、はじき出されず複数のベーゴマが残った場合、長く廻っていた方が勝ちになります。ルールは自分たちで色々考えて、楽しく遊びましょう。

加工の仕方(強くするための加工のいろいろ)

1.重さを重視する加工

飛ばされないために、文字の部分に溶かしたロウや金属の粒などを入れて重くします。この時、金属の粒などは瞬間接着剤で固めます。(参考:ロウベー、鉛ベー)

2.鋭くとがっている加工

バランスを良くするために、ベーゴマのおしり(山の部分)をヤスリやグラインダーなどで丁寧に削ります。八角削りや丸削りがあります。(参考:ケットンベー)

3.引っかかりを良くする加工

はじかれても動かないように、おしり(山の部分)を針のようにとがらせます。この加工は、中心がずれると修正がしにくいので、慎重に削ります。(参考:ハリケツベー)

4.相手の下にもぐり込む加工

攻撃力をアップさせるために、角(八辺)の部分を削ります。角度を浅く(寝かせる様に)すると相手の下のもぐり込みやすくなりますが、はじく力は弱くなります。角度を深く(立たせる様に)するとベーゴマの外径は小さくなりますが、はじく力は強くなります。

ベーゴマの加工をもっと詳しく知りたい方は、**楽しく遊べるベーゴマの世界2(上級編)DVD(¥2,200)**をご覧下さい。

ベーゴマの歴史

ベーゴマとは・・・

ベーゴマとは、鉄製の心棒のないコマのことです。タルの上にシートをかぶせて、その床の上で、おたがいの「コマ」をぶつけあって、はじき出して、勝負をきめます。はじき出された方が、負けとなります。

ベーゴマの起源

平安時代に、京都の周辺ではじまったと言われています。当時は、「バイ貝」という貝ガラに「砂」や「ネンド」をつめて、それを子供がヒモで廻したのが、始まりと言われています。

これが「バイ貝」です。

名前の由来

ベーゴマという名前は、「関東」に伝わってから「バイゴマ」がなまって「ベーゴマ」になったもので、今でも「関西」では、「バイ」又は「バイゴマ」と言われています。

貝ゴマ（伊藤晴雨「風俗野史」より）

ベーゴマの今と昔

鉄製の現在のような型のベーゴマは、明治の末から大正の中ごろにかけて作られはじめました。その後、大正の末から昭和の初めにかけて、東京の下町の子供たちの間ではやり始め、戦時中には金属の供出によって姿を消してしまいましたが、「セトモノ」や「ガラス」で出来たベーゴマが作られて遊ばれていました。

戦後、昭和20年代～30年代後半にかけて、子供たちの遊びの主流でしたが、時代の流れにより、「製造する鋳物工場」も少しづつ減少していきました。

その後、一軒だけ残ったベーゴマ製造工場で、ベーゴマが作られています。今までの工場は、数年前に閉鎖してしまいましたが、現在他の場所に工場を移して少量の生産をつづけています。